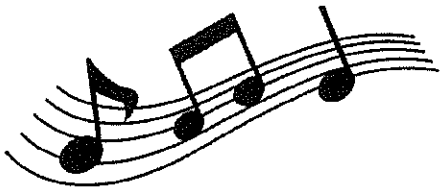
学内リサイタル講座　ジョイント・リサイタルVo.5

紅蓮に染めゆく音の風



2020年10月24日（土）

洗足学園 前田ホール

開場　14時00分

開演　14時30分

主催：洗足学園音楽大学・大学院

新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐためのお願い

・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。

・大声や対面での会話はお控えください。

・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。

・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。

・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。

・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。

・万一、集団感染の発生が明らかになった際には、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

ご挨拶

本日は学内リサイタル講座「ジョイント・リサイタル」においでいただき御礼申し上げます。洗足学園音楽大学のメインステージの前田ホールで、大学4年間の集大成の演奏を披露するために選抜学生39名による6回のジョイント・リサイタルを開催する運びとなりました。

各出演日の学生がそれぞれの思いで、プログラムや副題を決め、この日の為に準備をしてまいりました。専門コースの違いはあっても大きな会場で初めてのリサイタルを行う「責任と研究成果」を聴いていただければ大変な喜びとなります。出演学生が、その独自の構成と演出を競い、教員の講評審査を受けてこの舞台から巣立ち、現在は欧米各地に留学しコンクール入賞者や、国内外オーケストラ、教員、プレーヤーとして活躍する卒業生も多く、本学の講師として活躍するものもいるという喜ばしい実績を持っております。

この演奏会を基に日本の、そして世界の楽壇へと羽ばたく彼らに応援の拍手をお願いいたします。

学内リサイタル講座　教授　　渡部 亨

リサイタル講座第5グループの演奏会にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。新型コロナウイルス感染症が拡大している中このような演奏会を開催できること、心から嬉しく思います。

大学生活最後の年、このような状況になってしまった事はとても残念ですが、私たちが4年間学んできたことを発揮できるようメンバー一同、尽力いたします。

感染予防のため、客席の消毒、換気等の万全な対策をしておりますので、安心して本日の演奏会をお楽しみいただければと存じます。

終わりに、未熟な私達を支え、導いて下さいます先生方を始め、家族や友人、応援して下さるすべてのみなさまに心から感謝申し上げますとともに、今後も変わらぬご指導ご鞭撻をお願い致しましてあいさつとさせていただきます。

学内リサイタル講座　第5グループ インスペクター　　大隅 レオナ

Program

1　村松 紀親　(Flute)
作曲　P.サンカン / ソナチネ　　伴奏　井上 友美

2　合田 桜花　(Saxophone)
作曲　R.モリネッリ / ニューヨークからの４枚の絵 1.2.4 楽章　　伴奏　石田　多紀乃

～休憩～

3　盛喜 麻衣　(Trombone)
作曲　D.ブルジョワ / トロンボーン協奏曲　１楽章　　伴奏　小松　祥子

4　池田 耀　(Piano)
作曲　F.ショパン / ソナタ第３番 ロ短調 作品58より　1.4 楽章

～休憩～

5　大隅 レオナ　(Harp)
作曲　C.サン＝サーンス / 独奏ハープのための幻想曲 イ短調

6　野澤 朋子　(Trumpet)
作曲　E.エワイゼン / ソナタ　　伴奏　小松　祥子

1　村松　紀親　Norichika　Muramatsu
P.サンカン / ソナチネ　　伴奏　井上 友美

ピエール・サンカン（1916-2008）はフランスのマザメに生まれたピアニスト、作曲家、指揮者である。1932年にフランスに戻り、パリ国立音楽院でフーガをノエル・ガロン、指揮をシャルル・ミュンシュ、作曲をアンリ・ビュッセルなどに師事。1943年には『イカロスの伝説』でローマ大賞を受賞した。その後パリ国立音楽院で教鞭をとり、ジャン＝フィリップ・コラールなどを指導したことで知られている。1946年の第２次世界大戦直後のパリ音楽院卒業コンクール課題曲のために書かれ、当時、同音楽院フルート科教授であったガストン・クリュネルに捧げられている。

このソナチネは水の流れるような繊細な曲となっており、M.ラヴェルの「水の戯れ」を思い起こされることから、全体にラヴェルの影響を受けていると思われる。印象的なピアノのカデンツァを演奏して現われるアンダンテの部分は、静かな旋律からダイナミックに展開する。次いで現われるフルートのためのカデンツァの終わりに次のテンポ・アニメのモチーフが現われ、そのままピアノに引き継がれてめまぐるしく展開してゆく。

2　合田　桜花　Sakura　Gouda
R.モリネッリ / ニューヨークからの４枚の絵 1.2.4 楽章　　伴奏 石田 多紀乃

ロベルト・モリネッリ（b.1963）はイタリアで活躍する音楽家。ボローニャ室内管弦楽団の芸術監督や、ペスカーラ音楽院のヴィオラ科講師を務める傍ら、作曲家・アレンジャーとしても活動し、世界的に知られている。

第１楽章「美しい夜明け」 ソプラノサクソフォーンで演奏される。ニューヨークに日の出がさし、澄んださわやかな朝を迎える。壮大で輝かしい伴奏のあと、ソプラノサクソフォーンが抒情的で美しくどこか寂しい旋律を歌い上げる。

第２楽章「タンゴ・クラブ」 アルトサクソフォーンで演奏される。アルゼンチンタンゴの情熱的なリズムに乗せてサクソフォーンが砲哮する。

第３楽章「センチメンタル・イブニング」テナーサクソフォーンで演奏される。ジャズバラード調でテナーサックスの甘い旋律が、夕日が沈む様子を想起させる。

第４楽章「ブロードウェイ・ナイト」アルトサクソフォーンで演奏される。華やかに疾走する音楽。全編と通して楽しさに満ちた音楽の裏に、世界中の人々がアメリカに対して抱く複雑な感情、アメリカに対する情熱・憧憬・嫉妬・畏怖が混ざった感情が表現されている。

3　盛喜　麻衣　Mai　Moriki
D.ブルジョワ / トロンボーン協奏曲　１楽章　　伴奏　小松　祥子

ブルジョワはイギリスで活躍した作曲者で、ブリストル大学やセント・ポール女学院で勤務をしつつ、オーケストラや吹奏楽、室内楽、合唱曲、ソロ曲など作曲活動も行っており、幅広く作品を残している。

１楽章 イギリスの兵隊が行進しているかのような力強い旋律からスタートするこの楽章は、最初の旋律が形を変えて何度も登場する。途中で現れる優美な旋律はトロンボーンの優しい音色が際立つシーンとなっている。

２楽章 哀愁漂う切ない旋律で始まるこの楽章は、トロンボーンのもつ優しい音色と暖かのある中音域をたくさん使い、失恋の後のような儚く切ない心情を表している。三連符が割り切れないこの思いを表しているかのように思える。

３楽章 軽快なリズムで始まるこの楽章は、トロンボーンの技術面が光る楽章となっている。伴奏との掛け合いや半音階のスケールなど、様々な要素が盛り沢山である。

4　池田　耀　Yoh　Ikeda
F.ショパン／ソナタ第３番 ロ短調 作品58より 第１、４楽章

この曲はフレデリック・ショパンによって1844年に作曲されたピアノソナタである。第２番のソナタが作曲された５年後に完成し、ショパン屈指の大作となっている。見事な統一感のなかに、あふれるようなロマン派の香りをたたえ、あでやかで奔放な楽想、バラードやノクターンを想わせる各楽章の構成など、古典派のソナタとは違う独特なスタイルを持っている。晩年の作品のため、作曲された当時ショパンの健康状態も悪くかった。また、父親の死や、恋人のサンドやその家族とのトラブルも相次ぐという辛い情況にあった。

第１楽章、Allegro maestoso ロ短調、4/4拍子。ソナタ形式でかかれており、決然として意志的な強さを感じさせる第１主題と、ニ短調で現れる情緒的で優美な第２主題からできている。しなやかな音楽の流れが特徴的で、 ショパンの作品では比較的珍しい対位法的な書法が目立つ。

第４楽章、Prest,non tanto ロ短調、6/8拍子。ロンド形式で書かれており、情熱に満ちたフィナーレで、ショパンのたくましさがよく現れている。ショパンの〈熱情〉と呼ばれる程に力強い楽章。ヴィルトゥオーゾ的な技巧を要し、華麗で堂々たる表情を次第に高揚させ、圧倒的な力あふれるままに曲が終わる。

5　大隅　レオナ　Reona　Osumi

C.サン＝サーンス/独奏ハープのための幻想曲 イ短調

シャルル・カミーユ・サン＝サーンス（1835-1921）はフランスの作曲家、ピアニスト、オルガニストである。ユダヤ人を遠祖に持つともいわれる官吏の家庭に生まれる。10 歳でバッハ、モーツァルト、ベートーヴェンらの作品の演奏会を開き、16 歳で最初の交響曲を書いている。1848 年に 13 歳でパリ音楽院に入学し、作曲とオルガンを学びやがて作曲家兼オルガニストとして活躍した。音楽家として、作曲家、ピアニスト、オルガニストとして活躍したほか、様々な分野で才能を発揮した。一流のレベルとして知られているのは詩、天文学、数学、絵画である。

今回演奏する『幻想曲』は、C.サンサーンスの唯一のハープ独奏の作品である。1893 年 1 月にアルジェリアで作曲され、ラヴィコンテスデセグル・ラモイニョン夫人に捧げた。1893 年 5 月にフランスのハープ奏者、作曲家である A.アッセルマンにより初演された。

6　野澤　朋子　Tomoko　NozawaE.エワイゼン / ソナタ

E.エワイゼン / ソナタ　　伴奏　小松　祥子

エリック・エワイゼン（b.1954 年）はアメリカ合衆国出身の作曲家である。

この曲は、1995 年 5 月 30 日にインディアナ大学で開かれた国際トランペット協会の大会で、トランペット奏者クリス・ゲッカーと作曲家本人であるエワイゼンによって初演された。ゲッカーとエワイゼンは友人であり、エワイゼンがこの曲を作曲する上で最も強い影響を受けたのが、ゲッカーとのコラボレーションであったそうだ。

一楽章は Lento で始まったかと思うとすぐに Allegro になり、止まることなく流れ続ける川のように音楽が進む。最後は緩やかになり、周りに溶けるように締めくくられる。

二楽章は 6/8 拍子。エワイゼンが祖父を思い作曲されたと言われている。冒頭は現在の視点から過去を振り返る場面で、そこから懐かしさや切なさ、やるせなさが渦巻く回想シーンが続く。そして再現部では、過去を振り返った上で、切なくも明るい気持ちで未来を見据える主人公が表現される。

三楽章は、今まで我慢してきた強い感情が勢いを止めずひたすら吐き出される。時折我に返ったように優しい旋律が現れるがすぐに強いフレーズに掻き消される。そして最後は雪崩れ込むように曲が終わる。

第 5 グループメンバーのプロフィールは
QR コードからご覧いただけます。
通信環境が良いところでご覧ください。

本日はご来場ありがとうございました♪